

いなかおか 4



1998 No.131

東京都世田谷区歯科医師会会報



東南アジア旅行の知的楽しみ方 「インド化」された国々へ 遺跡の旅 -III

下馬部会 斎藤 賢一

インド二大叙事詩の一つである「ラーマーヤナ」は現在でもインド本国はもとより、カンボジア、タイ、ラオス、インドネシア等、東南アジアの国々で、影絵、演劇（舞踊）、読み物として生きつづけており、東南アジア旅行で見られた方も多いと思います。なんとこの「ラーマーヤナ」の説話のいくつかが、平安時代の「宝物集」に収められているのです。

東南アジアへのインド叙事詩の伝播（「ラーマーヤナ」を中心にして）



図-1 東南アジアのインド叙事詩の伝播
姫野 翠「インド・道の文化誌」より

それではこの「ラーマーヤナ」とはなんでしょう？「ラーマーヤナ」とはラーマ王行状記という意味の大叙事詩で全7編、2万4千の詩句（シュローカ）より成っています。主人公ラーマは神の要素を持ちながら、人間として地上に暮らすという制約が課せられ、様々な障害を乗り越えて最後には目的を達成する血わき肉おどる勧善懲悪の物語です。作者はヴァールミーキ

でこのラーマ王の伝説が一つにまとまったのは、紀元前数世紀の頃で、その後多くの増補が行われて、現存する形となったのは2世紀頃と推定されています。そして東南アジアに伝わり、特にカンボジアのアンコール朝や、インドネシアのシャイレンドラ朝の遺跡に彫刻されています。今回はこの叙事詩の物語を、インドや東南アジアの寺院彫刻を見ながらお話ししたいと思います。

1 少年編

コーサラ国の都アヨーディヤーのダシャラタ王は名君の誉れ高かったが、世継ぎが生まれなかったため、馬祭祀を行って神々に息子を授けてくれるように祈った。そのとき神々は強力な魔神ラーヴァナに苦しめられており、ヴィシュヌ神に、地上に降りてラーヴァナを滅ぼしてくれと頼んでいたところだった。そこでヴィシュヌはダシャラタ王の息子として生まれることを決意した。やがてダシャラタ王の三人の妃は全員妊娠し、第一王妃カウサリヤーはラーマを、第二王妃カイケーイーはバラタを、第三王妃スミトラーはラクシュマナとシャトル・グナを生んだ。ラーマはヴィシュヌの化身であり、他の三人もその神性の一部を持っていた。ラーマはラクシュマナと特に仲が良く、二人はいつも一緒に行動していた。ラーマはたくましく成長し、学問も武術も彼に並ぶ者はなかった。ある日、ヴィシュヴァミトラ仙が宮殿を訪れ、森に棲む悪魔を退治してくれるようにラーマに頼んだ。ラーマはラクシュマナとともに出発し、この森に棲む恐ろしい女魔人タータカを矢で射抜いて殺し、(写真-1)首尾良く使命を果たした後、旅を続けてヴィデーハのジャナカ王の宮殿に着いた。ジャナカ王には、シーターという



写真-1 「森に棲む魔女タータカを退治するラーマ」
「ロロジョンラン」インドネシア



写真-2 「シヴァ神の強弓を引くラーマ」
「ロロジョンラン」インドネシア



写真-3 「巨人ヴィラーダを退治するラーマとラクシュマナ」 「バナム・ルン」タイ



写真-4 「兄ラーヴァナに復讐を頼むシュールパナカー」 「バナータ」インド

美しい娘があり、ちょうどその婿を選ぶ儀式が行われていた。それは王家に伝わるシヴァ神の強弓を引くことができた者に娘を与えるというものだった。それまで多くの王子たちが挑戦しては失敗を重ねていたが、ラーマは、普通の人間には持つことも難しいその弓を、軽々と引いて見せたばかりか、(写真-2)力余ってへし折ってしまった。こうしてラーマはシーターと結婚し、弟の三王子もジャナカ王の親族の娘を妻として迎えて、両王家は幸福の絶頂にあった。

2 アヨーディヤー編

老齢となったダシャラタ王はラーマに王位を継がせようとした。ところが、自分の息子のバラタを王にしたいと考えていた第二王妃カイケーイーは、ダシャラタ王に、王が彼女に対してした古い約束を持ち出した。王は昔、彼女に危難を救われたとき、何でも二つの望みをかなえてやると誓っていたのである。カイケーイーはその約束を盾に取り、バラタに王位を譲ることを要求した。王の困惑を見てラーマは父を嘘つきにしないために、森へ行くことに同意する。ラーマにはシーターとラクシュマナが従った。ダシャラタ王は悲嘆に暮れ、病の床についた。王が死ぬと、バラタが即位を促されたが、母の策謀を憎んでいたバラタは王位につくことを拒み、森へ行ってラーマの帰還を求めた。しかし、ラーマの決心は固く、連れ戻すことができなかったのので、代わりに彼のサンダルをもらい、それを王座の上に置いて、約束の日限まで、ラーマの代理として国政を執ることにした。

3 森林編

ダンダカの森に住むラーマたちは、苦行者たちを悩ます人食い巨人ヴィラーダ等の悪魔や猛獣を退治したりして暮らしていた。(写真-3)そこへラーヴァナの妹のシュールパナカーが通りかかり、ラーマを見初めて言い寄った。拒絶されて怒り狂ったシュールパナカーはシーターを殺そうとして、逆にラクシュマナに耳と鼻をそがれてしまった。彼女は兄ラーヴァナの統治するランカー島へ走り復讐を頼んだ。(写真-4)妹を傷つけられておこったラーヴァナは、



写真-5 「鹿に化けたマーリーチャに弓を射るラーマ」
「ロロジョンラン」インドネシア



写真-6 「シーターをさらうラーヴィナ」
「ロロジョンラン」インドネシア



写真-7 「スグリーヴァとヴァーリンの戦い」
「バンティアイ・スレイ」カンボジア



写真-8 「シーターにラーマの指輪を見せるハヌマーン」
「カンベン・ヤイ」タイ

マーリーチャという旧友の魔人とともに、空飛ぶ車プシュパカに乗ってラーマのいる森へ向かった。鹿に化けたマーリーチャがラーマを誘い出している間に、シーターをさらう計画だったが、シーターのそばにはラクシュマナがいるため、なかなか近づけない。しかし、ラーマの矢を受けて倒れたマーリーチャが、(写真-5)ラーマの声で断末魔の叫びをあげたので、驚いたラクシュマナは急いで声の方角へ向かった。ラーヴァナは、シーターが一人になったのを見すますと、遊行僧の姿で声をかけ、隙を見て素早くプシュパカに乗せて空中に飛び上がった。(写真-6)シーターの悲鳴を聞いて、ハゲタカの王ジャターユが駆けつけ、行く手を阻もうとしたが、反対に斬り殺されてしまった。ランカー島に戻ったラーヴァナは、シーターの美しさに魅せられ、結婚を迫ったが、拒まれると、彼女を閉じこめて、監視させることにした。小屋に戻ってシーターの姿が消えていることを知ったラーマとラクシュマナは搜索の旅に出た。手がかりの少ないのが悩みだったがカバンダという森の怪物から、パムパー湖の傍らに棲む猿の王スグリーヴァを訪ねてみるという助言を得ることができ、二人は猿の国へと急いだ。

4 キシュキンダー編

パムパー湖についてラーマ兄弟は、猿王スグリーヴァに会うことができたが、彼は兄のヴァーリンによって追放の身になっていた。ラーマはスグリーヴァを助けてヴァーリンを殺し、王位を回復させた。(写真-7)スグリーヴァは恩返しにシーターを探し出すことを誓い、猿の大群を四方に派遣した。その中の一人ハヌマーンは力も知恵も頭抜けていたので、ラーマは彼に使者の証として自分の指輪を渡した。南に向かったハヌマーンは海の近くでジャターユの弟のサンバーティに出会い、ラーヴァナがシーターを連れて飛んでいくのを見たという証言を得た。しかし、確認するためにはランカー島へ渡らなければならない。ハヌマーンは潜入を決意した。

5 美麗編

ハヌマーンはマヘンドラ山の頂上に登って



写真-9 「ランカー島に架ける猿軍」
「ロロジョンラン」インドネシア



写真-10 「ハヌマーンに乗るラーマと猿軍」
「パンティアイ・サムレ」カンボジア



写真-11 「クンバカルナを起こすラーヴィア軍」
「ロロジョンラン」インドネシア



写真-12 「クンバカルナとラーマ軍の戦い」
「ロロジョンラン」インドネシア

思い切りジャンプし、四日間飛び続けてランカー島に着いた。体を小さくして城にもぐりこんだハヌマーンは、ついにアショカ樹の林の庭園でシーターを発見した。彼はラーマの指輪を見せて信用させると、(写真-8) 必ず救い出すからと励まし、帰りがけの駄賃にひと暴れ始めた。駆けつけた兵士たちを大勢倒したところで、ラーヴァナの息子インドラジットに捕らえられたが、ラーヴァナに対して、シーターを解放せよというラーマの要求を伝えた。ラーヴァナはハヌマーンを殺そうとするが、弟のヴィビーシャナに使者を殺してはいけないと諫められたので、代わりに尻尾に油のしみた布を巻き付けて火をつけた。ところが、ハヌマーンがそのまま外へ飛び出して町中を駆け回ったため、都是大火事になってしまった。使命を果たしたハヌマーンはマヘンドラ山に飛び帰り、ラーマに報告するためにスグリーヴァの許へ向かった。

6 戦闘編

ハヌマーンの報告を聞いてラーマは喜び、さっそく遠征の準備にとりかかった。問題はいかにして海を渡るかである。ラーマは弓に矢をつがえ、海の神に対して道を開けるよう要求した。海の神はそれは拒否したが、神工ヴィシュヴァカルマンの息子ナラに橋を造らせることを勧めた。ナラの指導のもと猿たちは石や木を集め、数日で洋上に橋を架けることに成功した。(写真-9) 猿軍はランカー島に侵入し、ラーヴァナの都城を包囲した。こうして長い戦いが始まった。(写真-10) 激しい戦いが続き、両軍の勇士たちは次々に死んでいった。ラーマ軍を滅ぼすために、ラーヴァナは弟の巨人クンバカルナを起こすことにした。(写真-11) 彼は六か月間眠り続け一日だけ起きているのだが、その一日のあいだは無敵であった。しかし、焦っていたラーヴァナは、まだ寝たりていないクンバカルナを無理に起こしてしまったのである。巨大なクンバカルナの出現に猿たちは逃げまどったが、ラーマは強弓をひきしぼって巧みに応戦し、最後には強力な矢でその首を切り落とした。(写真-12) 巨人の首は建物や道路を押しつぶ



写真-13「インドラジットの矢に倒れたラクシュマナ」
「ピマイ」タイ



写真-14「シーターとラーマの再会」
「パバナータ」インド



写真-15「王位につくラーマ」
「ロロジョンラン」インドネシア

しながら地を転がり、胴体は海に倒れ伏した。ラーマたちの最大の敵はインドラジットだった。彼は自在に姿を隠しながら投げ矢を放って猿たちを殺したが、ついにラクシュマナもその矢に倒れた。(写真-13) スグリーヴァの首相で医師でもある熊王ジャンバヴァットによると、瀕死のラクシュマナを救うためには、ヒマラーヤのカイラーサ山に生えている四種の薬草を夜明けまでもってこなければならないという。ハヌマーンは急いでカイラーサ山に飛んだが、肝心の薬草を見分けることができない。そこで山頂を丸ごと削り取り、戦場まで運んでき

た。薬草の力でラクシュマナはようやく命を取りとめたのである。インドラジットは今度は魔法を使ってニセのシーターを作り、ラーマたちの目の前で首を切り落として戦意をそごうとした。ラーマは悲しみのあまり気を失ったが、ヴィビーシャナが幻術であることを見破った。また彼はインドラジットの魔法の力はニクムビラーという場所で祭儀を行うことによって得ているのだから、その最中を襲えば殺せると教えた。ヴィビーシャナの手引きで、ラクシュマナがインドラジットを急襲し、ついにこの強敵を倒した。息子の死に激怒して、ラーヴァナは自ら戦場に出てきた。ラーマとの一騎打ちになったが、ラーマがラーヴァナの頭をいくら切り落としても後からまた生えてくるので勝負がつかない。しかしプラフマーの造った矢尻が心臓を貫くと、さしもの大魔人も倒れ息を引きとった。長い戦いに終止符が打たれ、シーターはラーマと再会することができたが、(写真-14) ラーマは彼女を再び妻として受け入れることを拒絶した。彼女の貞操を疑ったのである。シーターは身の潔白を証明するために、薪を積みせ火の中に身を投じた。火神アグニの保護によって彼女は火傷ひとつ負わなかったばかりでなく、アグニは自ら姿を現して、彼女が終始貞節だったことを証言した。ラーマは、自分はシーターを信じていたが、公衆の面前でそれが証明されることを望んだのだと答えた。こうしてすべての事件は解決した。ラーマ一行はアヨーディヤーに凱旋し、バラタとシャトゥル・グナの歓迎を受け、ラーマは正式に王位についたのである。(写真-15)

以上が大まかなストーリーです。インドでは今でもラーマは夫の鏡、シーターは妻の鏡として絶大な人気があります。インドを後にした神話は東南アジアを旅するうちに、行く先々の思想や風俗、習慣などによって、その姿や性格が少しずつ変わっていきます。東南アジアではハヌマーンが人気者になり、中国へ行って孫悟空になりました。もしかすると日本の桃太郎も「ラーマヤナ」がもとになっているかもしれません。